

江戸～明治時代における錦石に関連した石の名称

島口 天¹⁾

Name of stones related to Nishiki-ishi in the Edo-Meiji period

SHIMAGUCHI Takashi

キーワード: 江戸～明治時代, 今別, 深浦, 津軽, 錦石

はじめに

錦石という名称は、宮城（1969）が「錦石といわれるものを岩石学・鉱物学的に調べてみると、珪酸質のものを中心に数種類のものがあるため、今日では『青森県内津軽地域を中心に産する珪酸質の岩石・鉱物で、磨いて美しい光沢を示すもの』といった程度の定義しか当てはまらない」と述べているように、磨いて美しい光沢を示す珪酸質の岩石・鉱物の総称といえる。

江戸～明治時代の文献には、産地や状態、利用方法等の内容から上述の定義に当てはまると思われる石が複数記載されている。その名称には今別石や津軽石、津軽玉、津軽瑪瑙、撃壊石、吾妻石、錦石といったものがあり、錦石という総称でまとまてはいない。

ここでは、これらの石の文献記録について整理し、名称について考察した結果を報告する。

1 青森県内の文献記録

① 津軽史

弘前藩士であった永沢得右衛門によって書かれ、大正7年（1918）に完成した。寛文元年（1661）から慶応4年（1868）に至る弘前藩の公式藩政記録「弘前藩庁日記」の「御国日記」（国許における行政・司法・人事をはじめとする政務全般の動向を記した弘前城中での記録）からの引用も多い。

津軽史を活字に直したものに「みちのく双書 特輯 津軽史」があり、今別石に関する記述が多く見られる。第三巻、第七巻、第十二巻から今別石に関する記述を抜粋した（資料1）。

【内容および補足】

今別石に関する最初の記述は延宝4年7月15日（1676年8月24日）にあり、秋本六左衛門が今別石22個を献上するよう命じられたとある。最後の記述は元禄7年（1694）にあり、4月11日（5月4日）に今別石が拾える浜に高札を立てて石拾いを禁止したことが記されている。この間わずか18年程であるが、拾われた今別石は弘前藩に献上され、江戸に送られていた。天和3年正月20日（1683年2月16日）の記載には、江戸に参勤した

際に献上した品や有力者に御進物として差し上げた品があり、干鯛と共に大きな今別石2個（約85kg）も記されている。

今別石の特徴等に関する記述はないが、天和3年5月30日（1683年6月24日）には、江戸から注文のあった今別石と深浦町麴木のものと思われる「麴木石」について色や模様が記されている。今別石には白、黒、藍、赤、黄、紫のものがあり、色が混じっているものもあるほか斑模様のものである。また、「こはく石」という記述もあるが、琥珀のような色で透明感のある石のことだと思われ、玉髓が考えられる。麴木石の色には黄と赤のものがある。

② 津軽一統誌

享保16年（1731）5月に完成した弘前藩撰の史書。首巻および付巻を合わせて12巻よりなり、全体では約250年間にわたって津軽の風土と津軽家の事績を中心とする歴史が叙述される。首巻には序文、凡例、津軽家の出自、陸奥国・津軽地方の風土、津軽の名所旧跡・産貢・社寺の由緒といった藩の地誌の事項が掲載されており、産貢の項の一番目に今別石の記述がある（資料2）。

【内容および補足】

今別石は今別と襲月で採れる美石で、瑪瑙に似て職人が磨いて玉にし、小さいものは舍利石という。弘前城の東を流れる土淵川にも石があり、固有の美しさがある。

目録のページには、今別石の下に小さく舍利石と記され、さらに右肩に「並」と付された土淵石が記されていることから、今別石と土淵石は同等に扱われていたと考えられる。

③ 津軽俗説選

前篇、後篇、拾遺、後拾遺（続拾遺）、後々拾遺（千八百解）の5冊よりなるとみられ、前篇・後篇・拾遺は天明6年（1786）に選集し、後拾遺は寛政2年に書き始めて寛政7年（1795）に終わり、後々拾遺は寛政9年に書き上げられた（肴倉ほか、1974）。

後々拾遺の中の「襲月の佛舍利」の項に、「郡中名高き小石」として8つの石が挙げられ、その中に今別石、舍利石、吾妻石、撃壊石の記述がある（資料3）。

1) 青森県立郷土館 学芸課長（〒030-0802 青森市本町二丁目8-14）

【内容および補足】

舍利石は和漢三才図絵において、浜石と書いて津軽石と読ませる石とある。吾妻石は深浦の東浜の石で、その色や模様、形には様々あり、上方で縞目石や猿面石などという石も含む。平内の藤の浜（久慈ノ浜と思われる）にある五色石は、この吾妻石と同じものだという。撃壊石は土淵川から採れる石で、中に水泡や虫が入ったものもあるとされ、瑪瑙が考えられる。磨いて玉にし、緒締などにしたものを津軽玉という。津軽一統誌 首巻にある土淵石のことだと思われる。

同文献中の「瑪瑙多産」の項では、「志曰」以降を津軽一統誌 首巻の前半から、「考曰」以降を津軽地名考から引用している。

【内容および補足】

「志曰」以降と津軽一統誌 首巻（資料2）の記述に、原本からの写し間違いと思われる部分があり、資料2で「今別石」とある部分が「今別」と、「工人」とある部分が「土人」と異なっている。

津軽地名考は原本・写本とも不明で、著者は松田常蔵善奇、寛政年間に作成されたと考えられている。津軽地名考の引用として「俗に撃壊川と呼ぶ土淵川は久渡寺山を源に北流し城下に至る」とあるほか、「瑪瑙のような玉石が採れる」ともある。

撃壊川について、みちのく双書 特輯 津軽史 第十一巻に、津軽地名考からの引用がある（資料4）。「名跡二十七」の項にある「撃壊」の記述は、前述の津軽俗説後々拾遺「瑪瑙多産」の項の「考曰」以降、後半部とほぼ同じことを記していることから、撃壊川のことと思われる。また、「雅境」の項の「城東」では、「撃壊川」が久渡寺を源に城下に北流すること、和徳稲荷の北側を流れること、横町で川に架かる横町橋の高さが11～12m程度だったことの記述があり、「郊垆」の項の「南郊」では下野において川の東側は水田であったことの記述からも、撃壊川は土淵川のことであることがわかる。

津軽俗説後々拾遺や津軽地名考が書かれた寛政年間の絵図に「弘前大絵図（寛政12年）」（弘前市立弘前図書館／おくゆかしき津軽の古典籍）があり、この中で北横町の西側から北側へ土淵川が流れ、北側に橋が架かっているほか、和徳町の稲荷神社北側を土淵川が流れていることを確認した。よって、土淵川が正式な川名で、撃壊川は俗称であることが考えられた。

2 県外の人物による文献記録

① 雲根志

神秘的・伝説的な石、実用的な石、植物や貝の化石、碁石や床置石、鉱物類、石器類を大別して紹介した書物で、作者は木内石亭である。前編が安永2年（1773）、後編が同8年、三編が享和元年（1801）に発行された。前編五には「津軽石」と「津軽舍利母石図」、後編一之上には「舍利石」が掲載されている（資料5）。

【内容および補足】

津軽石は平館と今別の間の浜にあり、豆粒大のものは舍利石ともいう。大きなものになると枕や拳大のものがあり、角がなく山や生き物のような形をしているものもある。丸いものはナツメに似て赤白混じり、渦巻き模様が見られる。ナツメに似た丸い石は玉髓、渦巻き模様が見られる石は瑪瑙であると考えられる。

② 率土か浜つたひ、東遊記

舍利石について、菅江真澄の「率土か浜つたひ」や橋南谿の「東遊記」にも記載がある（資料6, 7）。「率土か浜つたひ」は、天明8年（1788）に津軽半島を東岸沿いに北進し、宇鉄から松前に渡るまでの日記。「東遊記」は、寛政7年（1795）～9年（1797）に発行された紀行文。

【内容および補足】

これらは雲根志が発行された年代と重複するためか、舍利石に関する記述は類似の内容となっている。東遊記には、今別の浜を瑪瑙浜という記述もあり、ここで採れる自然石や瑪瑙は津軽玉や宝石と呼ばれ、津軽玉は京都で緒締として使われていたとある。

③ 東遊奇勝

渋江長伯が、松平信濃守忠明の一行に加わって蝦夷地へ赴いた際の記録、全13巻。寛政11年4月19日（1799年5月23日）に、襲月から今別まで移動した際の記述がある。今別石は瑪瑙で、与茂内から今別の間の今別浜で採れるとある（資料8）。

④ 測量日記抄 蝦夷干役志

伊能忠敬が寛政12年（1800）に行った第一次の蝦夷地測量の際の記録で、9月20日（11月6日）に三厩を出て平館まで移動した記述中に「今別の海辺に津軽石あり」とある（資料9）。

⑤ 東奥沿海日誌

弘化元年（1844）から5年をかけて青森県の沿岸、樺太・千島を含む北海道を旅した松浦武四郎は、その旅程を集成した地誌「東奥沿海日誌」を嘉永3年（1850）に発行している（資料10）。

【内容および補足】

「今別村」の項に今別石に関する記載があり、今別石は一般に津軽瑪瑙と呼ばれていたとある。

また、深浦町の円覚寺のことと思われる「春光山大善院」の項には、珍品とすべき石類が記載されており、ひとつ目に錦石が書かれている。錦石という名称が文献に出てくるのは、これが初めてだと思われる。ただ、錦川の浜辺から出る美しい石を錦石と呼んでいるということ、先述のように今別石のことを別に記載していることから、錦石は地域限定的な名称と考えられる。

3 考察

各文献に掲載されている石の名称について、青森県内の文献および県外の人物による文献に分けて年代順に整理した（表1）。また、産地を図1に示した。

表1 青森県内の文献および県外の人物による文献に掲載されている石の名称

年代	青森県内の文献	県外の人物による文献
1650年	御国日記（1676年8月24日 今別石献上） ↓ 今別石 舍利石 麤木石 御国日記（1694年5月4日 今別石拾い禁止）	
1700年	津軽一統誌 首巻（1731年） 今別石 舍利石 土淵石	和漢三才図絵（1721年） 舍利石を浜石と書いて津軽石と読ませた
1750年	津軽俗説後々拾遺（1797年） 今別石 舍利石（和漢三才図絵参照） 吾妻石 撃壤石（磨いて玉にし、緒締などに加工したものを津軽玉という）	雲根志 前編五 後編一之上（1773 - 1801年） 津軽石 舍利石 率土か浜つたひ（1788年） 舍利石 東遊記（1795 - 1797年） 舍利石 今別の浜を瑪瑙浜といい、瑪瑙を緒締に加工したものを津軽玉という 東遊奇勝（1799） 舍利石 今別石は瑪瑙で、与茂内から今別の間の今別浜で採れる
1800年		測量日記 蝦夷于役志（1800年） 今別の海辺に津軽石あり
1850年		東奥沿海日誌（1850年） 今別石を一般に津軽瑪瑙という 錦石は錦川の浜辺で採れる

津軽半島北部海岸で採れた石を各文献から挙げると、今別石、舍利石、津軽石、津軽瑪瑙、津軽玉がある。今別石は県内の文献に見られ、県外の文献では東遊奇勝と東奥沿海日誌に見られるものの、瑪瑙を指し一般に津軽瑪瑙ということから、県外では今別石という名称が一般的でなかったことが考えられる。一方で、津軽石は県外の文献に見られ、雲根志では今別と平館の間の浜で採れる石、測量日記抄では今別の海辺にある石、和漢三才図絵では舍利石のこととされることから、今別石や舍利石のことだけでなく、その他平館までの広い範囲の海岸で採れる美しい石を含めた、県外における名称と考えられる。また、津軽玉は瑪瑙を磨いて玉にし、緒締などに加工した製品名と考えられる。

深浦町の海岸で採れた石を各文献から挙げると、麤木石、吾妻石、錦石がある。麤木石は、深浦町麤木の浜で採れた石と思われるが、吾妻石が採れた東浜と錦石が採れた錦川の浜辺の場所はよくわからない。

桜井（2002）に掲載されている『安政5年 岡本三弥「海岸略図」』の深浦海岸の図には「アヅマ浜、錦石アリ、錦浜ト云」と記されている。また、全国を放浪した画人・蓑虫山人の絵日記「山人写画」の中には、明治14年（1881）秋に円覚寺に滞在した際に描いたと思われる「深浦奇石」

と「吾妻浜錦石之図」がある（青森県立郷土館，2008）。前者には、黒曜石や琥珀石などに混じって「錦石」と記

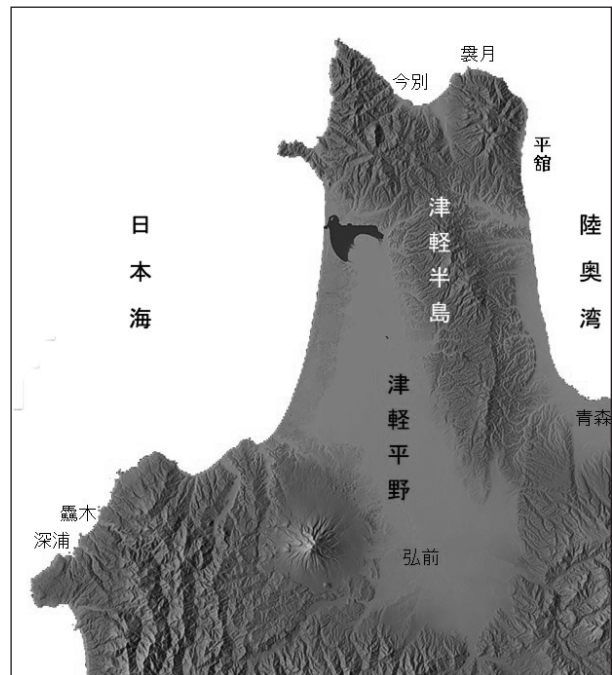


図1 各文献に記された石の産地

された複数の石が描かれており、個々に赤、黄、橙、青などに塗られている。後者には、陸側から浜の方を描いた図に喜円・敬明・尊海の3名が、錦石について詠んだ俳句が書かれている。

これらのことから、吾妻石の産地「東浜」は「吾妻浜」または「錦浜」であり、吾妻石と錦石は同じものであると考えられる。東奥沿海日誌も山人写画も深浦で使われていた名称を聞き取って書いていると思われるが、吾妻石が50年程で錦石と呼ばれるようになった、または吾妻石が錦石の別名ではないかと思われる。吾妻浜は現在の吾妻川河口の浜と考えられ、麤木の浜と離れているが、麤木石と今別石が同等に扱われていたこと、吾妻石と今別石は似ているということから、麤木石・吾妻石・錦石は同じような石と考えられる。

弘前城下では、土淵川から採れる撃壊石が緒締に加工され、津軽玉といわれていた。撃壊石という名称は、津軽俗説後々拾遺に記載されていることから寛政年間(1789～1801)には使われていたが、津軽一統誌では土淵石と呼ばれていることから享保年間(1716～1736)には、まだ使われていなかったと考えられる。

まとめ

江戸～明治時代の文献に登場する石の名称について整理し、考察した結果をまとめる。

- ・津軽半島北部海岸では、今別の浜で採れる美しい石を今別石といい、襲月の浜の小さな石を舍利石といった。県外ではこれらを含め、北部海岸一帯で採れる美しい石を津軽石といった。今別石については、津軽瑠璃と呼ばれたこともあった。
- ・今別の浜の瑠璃や土淵川の瑠璃(撃壊石)を磨いて玉にし、緒締などに加工した製品を津軽玉といった。
- ・深浦町の海岸では、麤木で採れる石を麤木石といい、吾妻浜で採れる石を吾妻石といった。吾妻石は、のちに錦石と呼ばれるようになった。
- ・今別石と麤木石は共に弘前藩に献上されていたこと、吾妻石は今別石に似ているということから、今別石・麤木石・吾妻石・錦石は同じような美しい石のことだと考えられる。

謝辞

本報告をまとめるにあたり、青森県文化財保護協会には津軽史の解説にご協力をいただいた。記して厚くお礼申し上げる。

参考・引用文献

- 青森県文化財保護協会(1974) みちのく双書 特輯 津軽史 第三巻. 青森県文化財保護協会, 青森, pp.469
- 青森県文化財保護協会(1977) みちのく双書 特輯 津軽史 第七巻. 青森県文化財保護協会, 青森, pp.601
- 青森県文化財保護協会(1981) みちのく双書 特輯 津軽

- 史 第十一巻. 青森県文化財保護協会, 青森, pp.538
- 青森県文化財保護協会(1982) みちのく双書 特輯 津軽史 第十二巻. 青森県文化財保護協会, 青森, pp.534
- 青森県立郷土館(2008) 蕨虫山人と青森 放浪の画家が描いた明治の青森. 青森県立郷土館, 青森, pp.88.
- 弘前市立弘前図書館/おくゆかしき津軽の古典籍 (<https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11C0/WJJS02U/0220205100>, 2020年2月21日閲覧)
- 木内石亭(1773-1801) 雲根志 前編. 国立国会図書館デジタルコレクション, 国立国会図書館. (<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2563668>, 2020年2月21日閲覧)
- 宮城一男(1969) 青森県石の旅. 東奥日報社, 青森, pp.263.
- 肴倉彌八・成田彦栄・成田末五郎(1974) 津軽俗説選解題(昭和26年7月). 新編青森県叢書(一), 歴史図書社, 東京, p.549-550.
- 桜井冬樹(2002) 「御国日記」にみる風待ち湊深浦のあゆみ. 深浦町教育委員会, pp.167.
- 佐藤勝雄編(1933) 蝦夷于役志. 伊能忠敬測量日記抄, 青森県立図書館・青森県図書館協会, p.15-29.
- 新編青森県叢書刊行会編(1973) 津軽俗説後々拾遺. 新編青森県叢書(二), 歴史図書社, 東京, p.69-151.
- 新編青森県叢書刊行会編(1974) 津軽一統誌 首巻. 新編青森県叢書(一), 歴史図書社, 東京, p.3-62.
- 橘南谿著・餐庭篁村校(1909) 東遊記. 国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/900281>, 2020年2月21日閲覧)
- 内田武志・宮本常一編(1971) 率土か濱つたひ. 菅江真澄全集 第一巻, (株)未来社, 東京, p.451-473.
- 山崎栄作編(2003) 渋江長伯シリーズ上 東遊奇勝 日光・奥州街道編. 山崎栄作, pp.621.
- 吉田武三編(1969) 松浦武四郎著 東奥沿海日誌. 時事通信社, 東京, pp.348.

資料1 みちのく双書 特輯 津軽史

(第三巻, 第七巻, 第十二巻)

[青森県文化財保護協会 (1974・1977・1982)]

延宝四年

七月十五日 秋本六左衛門江被仰付候今別石大小廿二
以甚右衛門上之 御日記

天和二年

十二月一日 今別之石・襲月之舍利石拵候て段々差上
候儀被仰付拵候目論可申付旨被仰付候故奉窺候

三拾石之者六人今別村ニ罷有候。此者共たつび崎
遠見番被仰付候処二去々年右之六人ノ内二人御引取、
当分同処ニて御用被仰付間先四人ニて垂相勤可申由
就被仰付候。二年之間四人ニて相勤候。前々之通六
人ニて遠見番相勤、其上非番之者両所之石掬ひ候様
ニ可仕と申上候。弥左様ニ被仰付候間所之者共海上
あれ候て石上り候と早速掬ひ候へハ能石も出可申様
ニ奉存候。餘所より石拾ひ申付候てハ右之者共被仰
付候程石も上り不申、其上態々其役人相立候も御費
之儀乍恐奉存候故奉窺候

十二月朔日

唐牛与右衛門
磯谷十介

御日記

天和三年

正月十一日 唐牛与右衛門今別石早々差上候。御小納
戸預役人江相渡置可申由被仰出候ニ付則御意之通申
渡之。右の石封印三上孫右衛門ニ申付相渡せ候

唐牛与右衛門右之石前々より上り候より能石共差
上候。弥右取候て能時分申付、沢山ニとらせ差上可
申由被仰出候

御日記

正月廿日 江戸江御参勤の節御献上其外方々様江御進
物の帳磯谷新八より請取置之

一、閏五月一日 御献上の干鯛御手本式枚長サ老尺
四寸

一、御老中様へ御進上干鯛御手本式枚長サ一尺一寸、
同一尺二寸

一、方々様江御進上御手本老枚長サ九寸台に積候干
鯛御手本四枚長サ式尺

右何も杉の箱に入

覚

式拾貳貫六百五拾目 今別石式箇

干鯛 壹箇 此貫目四貫九百目

ヱ式拾七貫五百五拾目

四拾貫目壹駄分にして 拾貳貫四百五拾目不足

新もづく 壹斗八升五合 壹樽貫目拾貳貫目有之
由に付て登せ申候

惣都合四拾貫目

閏五月日朔 警固 工藤 四郎右衛門

並足輕老人

右為宰料申付立之

二月十五日 従今別参候石福士九右衛門封印ニて唐牛
権太夫ニ相渡置之 御日記

五月十五日 水石之注文

此図ハ大きさを申入候大図ニ候間なりハ如何ニて
も見事成者を差越候様ニと御申付可有之候

此図より大き成石無用ニ可被成候、右之図よりち
いさきハ不苦作、乍然右之図より大振ニ候共至て見
事ハ有之候ハ大きニ候共、御越可有之候石之色ハ五
色之石、其外模様之見事成石又ハ常之見分悪敷候共、
水へ入見事ニ成候、石之類大俵老俵か小俵ならハ式
俵御登可被成候

亥五月七日

一、青 一、白 一、黄 一、黒 一、赤

五月十八日 唐牛与右衛門御廻船御用次ニ従江戸被仰
付候、石据ニ御持継之者八人召連今別へ可罷越之旨
申 二付、左様可仕之旨申渡之

五月廿日 一戸又左衛門御用之石取ニ御中間五人差添、
金井ヶ沢へ可罷越之旨申渡之、則石拾様之訳従江戸
被遣候、御書付之写相渡勿論右之石拾之儀世間へ沙
汰無之様ニ可仕候、尤能石拵御中間ニ拾わせ申間
敷候、此方へ申遣候儀ハ隠密以次飛脚申遣候様ニト
申付差越之

五月三十日 従在々鶴之尾羽老万本上り候由、菊地四
郎右衛門申立之候、御武具奉行へ相渡候様ニと申渡
之

一、明日江戸へ御用之今別石羸木浜之石差登之候注
文

一、白今別石御本之通一袋 一、黒石 同断

一、藍色 右同断 一、赤石 同断

一、黄色今別石

一、御本より大振もく石

一、御本より少土振交石

一、御本より大振もく石

一、御本之通交石 一、御本之通小白石

一、大振赤石 一、大振白石

一、大振小白石 一、大振色石

一、御本之通小振黒石 一、御本ヨリ小振黄石

一、御本之通交石 一、御本ヨリ大振黄石

一、大振黒石 一、御本之通交石

一、紫石 一、小振交石

一、御本之通交石 一、白土振石

一、御本之通少大振色石

一、御本ヨリ小振上交石

一、上小白小振石 一、今別またら石

一、またら小振石 一、小振赤石

一、黄小振石 一、白小振石

一、小振赤石 一、こはく石

一、小振白石 一、小振白石

一、小振紫石

合三拾八包ハ今別石

一、西之浜羸木石 一、羸木黄石

一、 麤木黄石 一、 麤木赤石
 合四包ハ西之浜石
 一、 右之石一所ニ御献上之干鯛御本之通ニ申付候、
 干鯛並御老中様へ被進候干鯛差登申候
 閏五月一日 今別西浜水石江戸就御用今日相立之
 丹野序右衛門組警固 工藤四郎右衛門
 同断 並足輕兩人
 右三人道中從今日十四日振ニ申付差登せ之右石之
 注文

一、 白今別石御本之通一袋 一、 黒同断老袋
 一、 藍色同断一袋 一、 赤同断老袋
 一、 黄色同断一袋
 一、 御本より大振もく石老袋
 一、 御本より少大振交石一袋
 一、 大振もく石老袋
 一、 御本之通こはく石一袋 一、 御本之通交石老袋
 一、 大振赤石一袋 一、 大振白石一袋
 一、 御本より小振黒石一袋 一、 御本より黄石老袋
 一、 大振こはく石一袋 一、 大振色石老袋
 一、 御本之通交石一袋
 一、 御本より大振黄石老袋
 一、 大振黒石一袋 一、 御本之通交石老袋
 一、 むらさき石一袋
 一、 御本より小ふり交石老袋
 一、 御本之通交石一袋 一、 白大ふり石老袋
 一、 御本之通少大振色石一袋
 一、 御本より小振上交石老袋
 一、 上こはく小ふり石一包 一、 今別またら石一包
 一、 またら小振石一包 一、 小振赤石一包
 一、 黄小振石一包 一、 白小振石一包
 一、 小振赤石一包 一、 こはく石一包
 一、 小ふり白石一包 一、 小振紫石一包
 一、 小振白石一包

一、 三拾七包ハ今別石
 一、 西浜とハ路木石一袋 一、 とハ路木黄石一包
 一、 とハ路木黄石一包 一、 とハ路木赤石一包
 一、 四包ハ西浜之石
 右差登せ候外之石唐牛与右衛門並御目付立合封印ニ
 て御土蔵ニ入置
 一、 今日今別石並御台所御荷物相立之
 一、 式拾貳貫五百五拾目 今別石貳個

貞享三年

九月廿四日 浜ニて将監・鞠負為持可申旨就被仰付候
 今別石六包並黒石一・白石一差上之 御日記
 十月廿四日 從今別上候石四袋小納戸江渡置可申旨被
 仰出候ニ付唐牛権太夫江渡之

貞享四年

二月二十六日 從今別石五袋參候趣ニて工藤左五衛門
 就致持參則差上之 御日記

元禄二年

十月廿二日 今別水石之御本石五從江戸參候、右御本

之石より大小少之違ハ不苦被思召候。御飛脚便二百
 目貳百目計宛差登せ可申候。尤御荷物相立候節ハ五
 升も六升宛も差登可申旨申来候。右之段中川小隼人
 と申合、段々御便之節差登候様可仕旨唐牛三左衛門
 江申渡之尤原七郎右衛門江も申渡之 御日記
 十二月廿六日 水石之儀来春馬便ニ二升程差登せ其外
 ハ来年舟便ニ差登せ候様ニと申来、唐牛三左衛門今
 別町奉行江申渡之 御日記

元禄三年

十二月廿九日 從今別緒締石五十九上ヶ申候。工藤長
 兵衛持參則達御耳候処御小納戸へ入置可申旨被仰出
 佐々木庄左衛門へ申渡之 御日記

元禄五年

十一月廿九日 今別石来年二月比石之上り候時分取せ
 可申由主膳被申、十二月十三日本締方へ申渡之
 御日記

元禄六年

二月十一日 今別石拾候奉行森山彦七郎申付候処左之
 通拾候由持參御城番川越清左衛門奉差上之
 上石 十四 一俵 同 十五 一俵
 同 十四 一袋 同小石 一袋
 同中石 廿二 袋 同 二ツ 一包
 此石今別罷歸候節石拾候者共半途ニて相渡候ニ付
 立合目付封印不仕候。爰元ニて齋藤孫介封印仕候
 中大石 二ツ 一包
 下石 二十五 一袋

右御徒目付清野久介封印仕候。先月晦日今別へ罷
 越、当月四日より七日迄拾取差上候旨口上書共二御
 城番川越清左衛門方へ申遣之、封印之儘ニて奉差上
 之 御日記

二月廿一日 森山彦七郎儀今別へ石拾ニ差遣候間御扶
 持賄可相渡旨佐藤源太左衛門へ申渡之 御日記

二月廿九日 今別石二十森山彦七郎持參之由成田七郎
 右衛門披露之

三月七日 今別石拾せ候て森山彦七郎持參之
 上石 一九 一袋 内二百性介作上ヶ申候由
 中石 二十四 一袋
 下石 三十二 一袋
 小石 百二十一 一袋
 舍利 二 一袋 襲月狄上ル
 中石 壹 大泊狄上ル
 右之袋森山彦七郎並足輕目付奈良清介封印
 御日記

元禄七年

三月十二日 今別石拾ひ奉行三上伝兵衛明日可罷越旨
 添田儀左衛門へ申渡之尤申付候御用之儀有之候間明
 四時会所へ可罷出旨申遣之

石拾立合目付笹森右衛門可申付旨佐藤源太左衛
 門へ申渡之 御日記

三月十三日 今別石拾奉行御手廻竹内甚左衛門目論書
 付添田儀左衛門差出之、則可申付旨申渡之計画

御日記
三月廿九日 今別石上中並小石共三百四十九御徒目付
笹森右衛門封印二て竹内甚左衛門指出之、御小納戸
役山田三右衛門へ相渡之 御日記
四月十一日 今別石有之浜二札可建置之旨鞆負被申左
之通相認之
是より今別町入口までのうみべにて
石一切ひろいとり申間敷者也
戊四月日
右之通相認今別町奉行へ相渡之 御日記
八月廿一日 襲月浜赤石浜石有之処へ御札之義先達而
郡奉行申出之、鞆負へ達之申付之御札文法左記之此
所之石一切ひろい取申間敷者也
八月日
右一ヶ所二枚宛申付之
※「御日記」は「御国日記」のこと

資料2 津軽一統誌 首巻

[新編青森県叢書刊行会編 (1974)]

産貢

今別石 纒月 二邑共ニ外ノ浜之海辺也
三才図絵ニ保呂豆木

此地ニ希代之美石ヲ生ス、工人琢磨メ珠ト為ス、其質
チ頗ル瑪瑙ニ似タリ、少ナル者ノ石舍利ト名ツリ、是
ヲ修メテ而信ヲ凝ラヒハ者必ス分形メ而其数ヲ増ス
亦タ当城ノ東ニ流レヨリ土淵號リ、此ノ川ニ石有、製
メ而亦之ニ類ス未タ雖モ於世ニ掲、焉其ノ固有之美ヲ
称メ、以テ茲于拳リ、亦タ是ノ所ノ小石其ノ形チ矢ノ
根ニ似ルモノ有 「如図」 色赤ク黒シ俗呼テ而天狗
矢ノ根ト曰フ、亦斧ニ似タル有リ、呼テ而天狗ノ斧ト
謂フ、形ヲ似テ名ト為セハ者可也

資料3 津軽俗説後々拾遺

[新編青森県叢書刊行会 (1973)]

襲月の佛舍利

襲月村の久左衛門という者の家に、大指くらいの石で
仏の顔の形をした仏舍利があるというが、舍利は本来米
粒のことであり、米粒のような小石を舍利というべきで、
鶏卵や大指のような大きさの石は舍利というべきではな
い。仏舍利は仏の尊体を焼いた灰から出るものであり、
海中から出るものではない。外ヶ浜極楽浜より出るもの
は、沖にある親石からこぼれ落ち、磯へ打ち上げられた
小石で、舍利の形をしているためその名がある。※前段
の概略

今別石 今別の浜石也、極楽浜の舍利石のごとく琢磨
きたる様に、艶ありて形基石に似たり、黒き
白き多々あり、透通り光あるものあり

舍利石 前に出でし所也

和漢三才図会に浜石と書て、津軽石と読ませ
しは是なり

吾妻石 深浦東浜の石也、今別石に似て光なし、赤き黒

き青白き色々にありて、千筋、雲形、木目、雲
形様々の模様あり、形も品々あり、当辰の秋
上様西浜へ御從駕之節、庭へ舗しとして竹越氏
の送られし石今にあり、石会とて上方にて集
めし縞目石、猿面石などいふ奇石皆此中にある事也

平内領藤の浜に五色石とてあり、吾妻石と
同じものなり

擊壤石 土淵川より出る石にして玲瓏として、中に水
の泡、亦虫の入りたるものあり、琢磨して玉
となし緒締めなどにする事也、津軽玉と称す
るもの是也

瑪瑙多産

郡中に瑪瑙多し。

志ニ曰、今別、幌月二邑共に外浜之海辺也、三才図絵
に保呂豆木此地希代之生ニ美石ニ土人琢磨爲レ珠、其質
類似ニ瑪瑙ニ、少者名ニ石舍利ニ依レ是而凝レ信者必分形
而増ニ其数ニ、考ニ曰、擊壤川俗曰、土淵川源發ニ久渡寺
山ニ北流シテ至ニ城下ニ、南シテ出ニ湯口山中ニ、東北シテ過ニ
城下ニ巡リニ街市ヲ入ルニ岩木川ニ水辺多ク出ニ玉石ヲ
以ニ瑪瑙ニ亦有ニ赤黒者ニ或ニ形如レ斧、曰ニ天狗斧ニ或如
レ斧曰ニ天狗斧ニ

資料4 みちのく双書 特輯 津軽史 (第十一巻)

[青森県文化財保護協会 (1981)]

名跡 二十七

擊壤 水辺出璞石以為玉瑪瑙人有天狗矢根石天狗斧石

雅境

城東

横街橋 架横街擊壤川長橋也高六七尋

消夏丘 在和徳稻荷後丘後左右林樹密匝只北一方豁平
帯擊壤川流雖長夏炎々之時常有涼風

擊壤川 源泉出区久渡寺北過都下

郊垆

南郊

下野 擊壤川以東負郭水田

資料5 雲根志 [木内 (1773-1801)]

津軽石 (前編 五)

奥州津軽領の外の浜平館と今別との間の浜の砂中にあり。

豆粒のごとくして円く、五色に光り透りはなはだ美物
なり。

俗に舍利という。

所々開帳に舍利塔に納めて出る、多くはこの物なり。

器に入れおくに、年を経てその数ふゆるなり。

また大なるものは枕のごとく拳のごとし、その状角な
く、あるいは山の形をなし、または生類の状あり。

好事の者拾い得て飾物に愛す。

丸きものは棗桃のごとくして赤白相交り、人の手の筋
のごとくうずまき、美なることとの石におよぶものな

し。

津軽舍利母石図（前編 五）

（抜粋）また小さきものを産むの親石あり。舍利親、舍利母石などいう。これは沖なる島にあり、大石なり。そのへんの人を頼めば小舟にてかの大石にいたり、破り来たる。つねの石にして豆粒のごとき舍利石をはらみ居る。舍利石他国にて母衣月砂という。

舍利石（後編 一之上）

奥州津軽外浜にあり、大きさ小豆のごとくにして丸く、透きとおって黄、赤、白あるいは一色、光明ありて甚だ美なり。昔みだりに拾い採りしを近世赤根沢に番所を建ててこれを制す。この舍利年を追って分増すという。今世諸方の開帳に仏舍利と称するもの、予これを見るにすべてこれらの類をもっていつわる。伝えいう真の舍利はいかなるものにて打つとも砕けることなし。

資料6 率土か浜つたひ [内田・宮本編（1971）]

（舍利浜の部分抜粋）

… その高さはどれほどあるかわからないほど高い胎内潜、また犬潜とも、あるいはしろいぬくぐりともいっている、ひきまたのようにわかれた岩の穴を通して、母衣月の浦で休み、舍利浜に出た。地蔵の滝という滝が檜原のあたりをおもしろく落ちていた。…

この滝の落ち口や流れの末あたりの砂をかきわけると、黒い砂の中にまじって露のこぼれたように石舍利がたくさん出る。これは沖合に舍利母石といって、伏しているような形の大岩があり、そのめぐりにはしただみ（小巻貝）がたくさんはいまわるように。

その石に含まれていた石舍利が晴れた夜の星のように、こなごなになり、海に落ちて波にさっとうちよせられては、ここに寄ってくるのだと、浦人が言った。

資料7 東遊記 [橘著・饗庭校（1909）]

（舍利濱の部分抜粋）

奥州外が濱にホロツキといふ所有り。この海辺に舍利濱あり。小石濱なるが、その中に舍利石まじれり。白きあり、あめ色なるあり。大きさ豆のごとく、米粒のごとく、明徹滑沢甚だ愛すべし。その所を通りし日は天気まことに朗らかなりしかば、濱邊に座し、舍利石をひろひ、甚だ楽しみり。回国修行の者などは、この舍利石をひろひ、大に尊信する事なり。まことに奇なる事は、この濱の磯近く海中に広さ五十間程の舍利母石あり。この舍利母石より常に舍利を産し、その舍利おちてこの濱に打ち上げ、古今絶えずこの所に舍利多しとなり。その舍利母石水面よりよほど深く沈みいて、濱邊よりは見えがたし。この辺の両夫に頼れば海底に没入して、玄扇にて打破り取あがる事なり。これゆえに舍利母石を得る事はすこぶる難し。されど珍しきものなれば、余も指の頭程の舍利母二ツ三ツを得て帰れり。全体の色は薄黒く、土の化したる石のごとくして、その中に米粒のごとき小舍利おび

ただしくはらめり。誠に奇なる石なり。また、この舍利濱の先に今別といふ所あり。二三里も隔てり。ここの濱を瑠璃濱といふ。この濱に入る前後に自然の石門あり、甚だ奇境なり。それより内凡半道余、瑠璃石の濱なり。もつとも常体の石も半まじれり、凡石も瑠璃も大きさ大抵拳の程より、鶏卵、あるいは小さき蚕豆のごとし。皆々甚だ明徹にして、京都に緒締にするなり。世に津軽玉といひ、又は寶石ともいふ。人馬往来する濱なれば、足元に玉石みちみち、殊に日光にきらめきて目眩ずる許なり。そのうるはしに心留りて通行くも覚えず。

程よきはひろひ取りて袖に入る程に、両の袂やぶるる許なり。されど長き旅路携え帰りがたく、毎夜三ツ四ツづつ人へ与へ、京まで携へ帰れるはずかばかりなり。かくのごとき濱京近くにあらましかば、守る人も厳敷、門戸等もありて、みだりに見る事だにも許さまじきを、かかる人無き辺地なれば、道行く人の取るに任せ、誰一人禁ずる者なし、珍敷地なり。

資料8 東遊奇勝 [山崎編（2003）]

四月十九日

襲月の宿を出、浜手平砂にて此所に瑠璃多し、其内大如豆加黍米円滑にして光彩有るものを舍利石と云、土人舍利浜と云なり、下りを深沢の坂と云。

（中略）

よもないより今別迄の間を今別浜と云て、今別石を出す、瑠璃なり、此所にて黒石髓の大石武塊を得たり。

資料9 測量日記抄 蝦夷千役志 [佐藤編（1933）]

泊順

申九月廿日 朝より薄曇、晝小雨、夜ハ中雨。朝六ツ後三廐出立、一里 今別村、五里廿町十五間五尺 母衣月、中食、此海辺にシャリ石アリ、今別ノ海辺ニ津軽石アリ七ツ頃平館村に止宿、三廐より村々役人案内

資料10 東奥沿海日誌 [吉田編（1969）]

今別村

今別石

世に津軽瑠璃というなり。この浜満面この石なり。中に含水石あると聞く。また、この村の風習として七月には先祖の墓所にこの石を多く持ってきて、その囲いに寄せる。ゆえに寺の墓所は一面この石で甚だ美しい。

春光山大善院

錦石

錦川の浜辺より出るよし。青石、赤石等多くまじりて色よくなるなり。汐干には甚だ美しきものなり。